



京大広報

No. 720

2016.3



平成27年度京都大学総長賞表彰式を挙行 —関連記事 本文4589ページ—

目次

学生支援—京大が見落としてきたもの 学生・図書館担当理事・副学長 川添信介4586	〈洛書〉 腎臓内科学講座設立5周年を迎えて 柳田 素子.....4592
〈大学の動き〉 部局長の再任.....4588 山極総長がインド工科大学グワハチ校(IITG)との 大学間学術・学生交流協定調印式に出席4588 本学と東映が包括連携協定を締結.....4588 平成27年度京都大学優秀女性研究者賞(たちばな 賞)表彰式を挙行.....4588 平成27年度京都大学総長賞表彰式を挙行.....4589	〈栄誉〉 富谷 至 人文科学研究所教授がスウェーデン王 立アカデミー外国人会員に選ばれる.....4593
〈寸言〉 “私の京都” 赤崎 勇.....4590	〈話題〉 基礎物理学研究所に新しいスーパーコンピュー タシステムを導入.....4593 2015年双青戦閉会式を開催.....4594 平成27年度総長杯(第2回ボウリング大会)を開催4594
〈随想〉 日本語のルーツ：サンスクリット起源説 名誉教授 梶 慶輔.....4591	〈特集〉 ノーベル物理学賞受賞者・赤崎 勇 博士と 京都大学.....4595

京都大学企画・情報部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

学生支援—京大が見落としてきたもの

学生・図書館担当理事・副学長 川添 信介

存在しないものは経験できない

私は40年以上前、京大に入学するために九州の片田舎から京都にやってきたわけですが、その私にとって最初に解決すべき課題は、どの授業に出席しどんな本を読むべきなのかということではなく、どこに住むのかということだったはずです。ある伝で南禅寺の塔頭の中の下宿に住むことができたのは幸運でしたが、初めての一人暮らしでもあり、さまざまなレベルでの京都暮らしへの不安を抱えていたはずです。このあたり「はず」というのは、もちろん記憶が不確かになっているためですが、下宿での最初の晩に、同志社に通う下宿の先輩に連れて行ってもらった近くの食堂で、「これからこんな風に京都では生活するのだ」と何か奇妙な感慨を覚えたことはよく覚えています。こんな住居や食事など生活上のことで、京大は何の支援もしてくれませんでした。

ところが、どの授業に出席すべきでどんな本を読むべきなのかについても、京大は何も示してはくれませんでした。この点は私が文学部に入ったという事情によるところが大きいかもしれませんが、昔の教養部ではどの学部の新入生にとっても似たような状況だったような気がします。どういう風に勉強を始めたらいいいのかを考えることも勉強のうちだ、といった風でした。

しかし、学生に対する京大のこのような「無支援」に、昔は私を含めて誰も不満を持っていたわけではなかったように思います。今から思うと、不満がなかったのは当然です。そこに存在せず見たこともないものについては、それが存在しないと気づくことも困難なことです。だから、人は単に「存在しない支援」に不満など持つはずはなく、不満を持つとしたらそれは存在すべきだと分かっているものの不在、つまり「欠落」に対してだけのはずなのですから。



学生支援：何が変わり、何が変わっていないか

このような私の経験は今や「昔話」に過ぎないと言えるのでしょうか。いろいろなアンケートや調査結果によれば、現在

の京大生も京大の「学生支援」の現状に大きな不満は持っていないようにも思われます。もちろん、本学が学生諸君に与える最大の「学生支援」とは、その素晴らしい学修・研究環境でしょう。そして確かに、大学の正課というこの面では、各部局の現場はかつてよりは「学生の方を向いた」環境の構築に力を注ぐようになってきました。まだ不十分かもしれませんが、「無支援でよい」とはもう誰も思わなくなっていると思います。「自由の学風」は京大の誇るべき伝統であり、現在も多くの貴重な学問的・教育的成果を生み出している土壌であることは疑い得ませんが、学修上の助けを求めている学生諸君を支援することは自由の学風と矛盾するわけではありません。この面では私の経験は昔話になっていると言ってよいでしょう。

しかし、正課以外でのいわゆる「学生支援」の側面ではどうでしょうか。昨年11月に「学生担当」の理事・副学長を務めはじめました(図書館の担当でもあるのですが、その話は別の機会にします)。副学長としては「厚生補導担当」という古めかしい職掌名になっていることにも現れていると思いますが、学生諸君の正課以外でのキャンパスライフに対する京大の学生支援活動は今でも貧弱なままだという思いを強くしています。

冒頭で私の個人的経験と合わせて述べた、学生の食や住居といった生活の足腰にあたる面の支援は、基本的に京都大学生生活協同組合(京大生協)に任せて

いますし、新入生に京都での衣食住をどのようにしてスタートさせたら良いのかなどについて、法人としての京都大学はほとんど何の情報も与えていません。また、スポーツや文化活動といった課外活動のための施設とサービスは、他大学と比べて充実しているとはとても言えない状態です。さらに、さまざまなレベルでメンタルな問題を抱えながら苦しんでいる学生が顕在化していますが、「学生総合支援センター」のカウンセリングルームや障害学生支援ルームは彼ら／彼女らに十分対応できていません。学生支援のための学生生活委員会に学生総合支援センター長が正式の委員として参加するようになったのは、驚くべきことに、この1月からのことです。

そして何よりも象徴的なのは、本学の吉田、熊野、女子、室町の四つの寄宿舎(寮)の状況です。昨年度に吉田寮の新棟が増設されたことを除いて、この四寮は私が京大に入学した時とほとんど何も変わっていません。私が40年以上前に住んでいた南禅寺の塔頭の当時の下宿は、同時期の四寮の環境とそれほど大きな違いはなかったかもしれませんが、ワンルームが一般的な現在の住環境ではどうでしょうか。他方で、現在の厳しい経済・社会状況のなかで、住居費をできるだけ抑えたいと願っている学生諸君の数は増えており、そのような願いに京大は支援の手を差し伸べられているとはとても言えません。

このような「学生支援」の面を見れば、本学の学生に対する「無支援」というあり方は、昔話とはとても言えないでしょう。

最大の社会貢献のために

今述べてきたような「学生支援」ということには、どこか「京大らしくない」という印象を持つ方も多かもしれません。「自由の学風」という言葉の意味には、「学生には放任こそ最高の教育」というニュアンスが含まれているのでしょう。また、学生への「支援」などというものには、どこかで学生への「管理」の匂いを感じたり、学生を一人前の大人として扱おうと

しないことへの反発もあるかもしれません。

京大に育ててもらった私にも、同じ思いがないわけではありません。しかし他方では、正課の面でもそれ以外の面でも、京大にもう少し手厚い学生支援があったら、私自身がもう少しはまじな人間になっていたかもしれない、自分はただ幸運だっただけかもしれないという思いも強いのです。

もちろん私が学生だった40年前とは、社会の状況もその中で大学の立ち位置と役割も大きく変化しましたし、学生自身の気質や志向も様変わりしています。その変化に応じて学生支援の内容も変わるべきでしょう。とはいえ、大学とは学生を育てる場であるということに本質的な変化がないとしたら、大学の最大の社会貢献は一人ひとりの学生のポテンシャルを最大限まで引き出すということにあるはずです。本学の学生諸君はみな高いポテンシャルをもって入学してきますが、その高いポテンシャルをどこまで発揮させてやれるのかが本学の価値を決めることになります。山極壽一 総長の「WINDOW構想」の言葉を借りるならば、「背中をそっと押して」あげるような支援がすべての学生たちに対して必要なのだと思います。これは「自由の学風」と相容れないものではないし、京都大学らしさを捨て去ることもないと私は考えています。

従来の「学生部」・「学務部」はあらたに「教育推進・学生支援部」と名称を変えました。このうち私は「学生支援」の領域を主に担当しているわけですが、この名称変更を喜んでいます(「厚生補導」副学長という呼称の方は何とかしたいのですが)。長い間見落とされてきたように思われる「学生支援」という考え方が、今後は本学でも根付いてゆくように、教職員の皆さんだけでなく学生諸君自身の協力も得ながら、微力を尽くしたいと思っております。どうかよろしくお願いします。

大学の動き

部局長の再任

(再任)

野生動物研究センター長

幸島司郎 野生動物研究センター教授(健康長寿科学研究部門担当(健康長寿科学))が、平成27年10月16日付で野生動物研究センター長に再任された。任期は平成29年10月15日まで。

山極総長がインド工科大学グワハチ校(IITG)との大学間学術・学生交流協定調印式に出席

1月14日、本学とインド工科大学グワハチ校(IITG)との大学間学術・学生交流協定調印式が総長応接室で行なわれた。調印式には、山極壽一 総長、稲葉カヨ 国際担当理事・副学長、宮川 恒 農学研究科長、寶 馨 防災研究所長、藤井滋穂 地球環境学堂堂長らと、インド工科大学グワハチ校学長代理としてSubashisa Dutta 教授、およびIITG一行が出席した。

(企画・情報部(国際企画課))



山極総長とDutta教授(IITG学長代理)

本学と東映が包括連携協定を締結

3月9日(水)、本学と東映株式会社は、京都府の仲介により映像と文化による新しい社会価値創造をめざした包括連携協定を締結した。

本協定によって東映の撮影所がある太秦での産学公連携を積極的に進め、本学の知を活用した「東映太秦地区イノベーションプログラム」に取り組むとともに、東映がこれまで技術開発と事業化を行ってきた「映像とエンターテインメント」分野における将来の姿を見据え、映像を介しての文化発展に寄与することを目指す。

また、仲介を行った京都府が取り組む「京都クロスメディアパーク構想」の推進に向け、映像を核とした産業の育成などの施策展開を通して連携を進めていく。具体的には、映像制作や編集、配信など



左から山極壽一 総長、山田啓二 京都府知事、岡田裕介 東映会長の技術開発やコンテンツ系のベンチャー育成支援を行う。

(研究推進部(産官学連携課))

平成27年度京都大学総長賞表彰式を挙行

3月14日(月)、学業・課外活動・社会活動等において顕著な活躍をし、京都大学の名誉を高めた学生および学生団体を表彰する「京都大学総長賞」の平成27年度表彰式を北部総合教育研究棟益川ホールにて挙行了。

今回は全15件の推薦の中から選考の結果、8人と1団体の計9件の受賞者が決定し、表彰された。

表彰式では、初めに川添信介 学生担当理事・副学長(学生表彰選考委員会委員長)から選考結果の報告があり、山極壽一 総長から表彰状・記念品授与の後、総長が講評等を行った。

表彰式後の記念撮影ののち、各受賞者からプレゼンテーションが披露され、総長、理事からも質問が出るなど盛況のうちに終了した。



講評を行う山極総長



受賞者によるプレゼンテーション

表彰者・表彰団体名	分野	表 彰 理 由
CFA Research Challenge 京都大学チーム (代表)経済学部経済経営学科4回生 佐藤隆太郎	学業	CFA協会によって開催された第10回大学対抗企業価値評価大会によって、京都大学としては初優勝し、アジア太平洋地区大会に日本代表として出場権を獲得した。
医学部医学科6回生 西嶋佑太郎	学業	医学用語の読み方の多様性とそれを標準化する動きについて歴史と展望を述べる論文を作成し、漢字検定の主催する懸賞論文で最優秀賞を受賞した。
医学研究科人間健康科学系専攻DC1回生 松尾 英将	学業	日本在住者として初めて米国臨床検査技師の国際資格を取得し、資格制度に関する論文発表や講演等を行った。さらに小児白血病の予後因子を複数同定し、筆頭著者として国際誌に多数の論文を発表し、2015年の米国血液学会において優秀演題賞を受賞した。
理学研究科生物科学専攻DC2回生 脇 華菜	学業	尾索動物カタウレイホヤの発生と遺伝子ネットワークを主題とした研究において、「The 8th International Tunicate Meeting」においてベストポスター賞を受賞し、Nature Communicationsに筆頭著者として論文を発表した。
人間・環境学研究科共生人間学専攻 DC3回生 萩生 翔大	学業	筋シナジーに関する研究に取り組み、生理学、バイオメカニクス、体育学の分野における国内学会において若手研究優秀賞及び奨励賞を4件授賞した。筆頭著者として、運動制御、神経生理、生体工学、バイオメカニクスの国際学術誌に5本掲載した。これらの国際学術論文が評価され、Emerging Scientist Awardを日本人で初めて受賞した。
理学研究科化学専攻DC3回生 吉村 瑤子	学業	第10回「ロレアル・ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」を物質科学分野にて受賞した。さらに、受賞となった研究内容をNature Physicsに筆頭著者として発表した。
工学部地球工学科4回生 矢内 拓	課外活動	2年に一度開催されるルービックキューブの世界大会において4×4×4の目隠し競技で2位となった。
体育会ボート部 地球環境学舎環境マネジメント専攻 MC1回生 濱口由紀子	課外活動	京都大学ボート部女子では初となる、全日本大学選手権大会女子シングルスカルで7位入賞の他、東日本選手権大会では社会人に混じって3位に入賞した。
法学研究科法曹養成専攻3回生 徐 東輝	社会活動	学生組織ivote関西の代表として活動を続け、Webメディア「SeiZee」の運営、本学においては、合同説明会「START」の企画・運営を行った。 World Economic Forum(ダボス会議)のGlobal Shaperに、また、日本版ダボス会議といわれるGI会議の25歳以下代表に選出され、京都人間力大賞を受賞した。

(教育推進・学生支援部(厚生課))

寸言

“私の京都”

赤崎 勇

私が京大に入学した1949年の秋、湯川秀樹先生がノーベル物理学賞を受賞された。当時は、敗戦後の復興途上にあって、ノーベル賞という言葉すら忘れかけていた時代で、日本人初の受賞の報道は、国全体を明るくしたような気が



した。^{もっと}尤も私にとっては、湯川先生も、先生のご研究も、“雲の上”のことであり、到底、先生のようなことは出来ないが、「(賞とは全く関係なく)、何か小さいことでも、今まで誰もやっていないこと、あるいは実現できていないことを、いつか自分もやってみたい」と、夕暮れの近衛通りを歩きながら思ったことを覚えている。

2014年10月26日の京都新聞「天眼」で、湯川先生の愛弟子で京大名誉教授の佐藤文隆先生が、「…同報道は、助教授時代の岡本道雄先生(第19代京大総長)に衝撃的感動を与えた…」ことを紹介されている記事を拝見して、数十年前の感動を新たにした。

この寸言のタイトルは、佐藤先生の名タイトルに倣った。

私は小学生時代の夏休みに、両親の出身地である鹿児島県知覧町(現、南九州市)を訪れたことがある。その“武家屋敷”の見事な庭は、キョウトから職人をよんで造られたと聞いた。私の心に、「キョウト」に対する憧憬が芽生えていた。

旧制中学時代は太平洋戦争の真っ最中で、学徒動員、空襲、食糧難など極めて困難な時代を過ごし、漸く1945年8月、4年生の動員中、敗戦を迎えた。

翌'46年3月、旧制七高理科甲類を受験、運良く合格はしたものの、鶴丸城址の校舎も全焼しており、県北部の出水の旧海軍航空隊跡地で開校したのは、同年11月であった。その寮で同室の京都の中学出身の友人から、京都のことをよく聞くうちに、何時しか、(小学生時代の)キョウトは京都になっていた。

七高3年生の時、親しい先輩の京大生から、京大

の学風、諸先輩のご活躍などお聴きし、「京大受験」を決めた。

(閑話休題)私が発熱を伴わない発光である“ルミネッセンス”に出合ったのは、最初の職場である神戸工業株式会社(現、富士通株式会社)でブラウン管(B管)の蛍光面を担当することになった時である。この現象を実際に観るのは初めてで、夢中になり、一生関わるようになった。当時のB管用蛍光体は、硫化亜鉛(ZnS)系の多結晶粉末で、(後年、他の目的でメタルバック技術が開発されるまで)、発光の一部が蛍光面に吸収されるのがもどかしく、ZnSの単結晶を作れば透明になる筈で、その薄膜をB管のフェースプレートに張りつければ(現在でも困難?)、明るい映像を実現出来るのではないかと夢の様なことを考えたことがある。(この“光る半導体単結晶薄膜”は、ずっと私の潜在意識にあった。)

一方、当時はトランジスタの草創期で、神戸技術部の友人が、その為のゲルマニウム(Ge)単結晶の研究をしているのが羨ましかった。ただ、Ge単結晶は魅力的だが、光らない。やがて、学術的にも産業としても半導体の重要性の認識が深まるとともに、八大学に電子工学科が新設され、名古屋大学の半導体工学講座の教授に就任される上司のお誘いを受けて、'54年春から、名大でGe単結晶やトランジスタの研究を開始した。

そこでの、“Ge薄膜単結晶のエピタキシャル成長”の研究が縁で、東北大学の小池勇二郎教授が所長を勤める松下電器東京研究所の研究室長に招かれ('64年)、かねて温めていた、“光る半導体”の研究を開始。高性能の赤色、黄緑色LED等の研究をしたが、可視光のうちエネルギーの最も大きい青色のLEDの実用化の見通しは'70年代に入っても全く立たないことを知った時、“これこそ自分のやるべき仕事”と決心した。京大入学から、実に20年が過ぎていた。

そして、未到の半導体：“窒化ガリウム(GaN)pn接合による青色LED実現”を目指す私の長い“旅”が始まった。GaN系半導体の研究は今も続いている。

(あかさき いさむ、名城大学終身教授／名古屋大学特別教授、昭和27年、理学部卒業)

随想

日本語のルーツ：サンスクリット起源説

京都大学名誉教授 梶 慶輔

明治時代に本学文学科梵語学梵文学講座を担当した足利惇が師と仰ぐ英学者平井金三(きんざ, 本名金三郎)は明治37年以降「新公論」誌に日本語＝アーリヤ語説を発表している。しかし、当時学会ではウラル・アルタイ語族説が定説であり無視された。近年では大野晋がタミール語説を出したが、これも疑問視されている。インドにおける古い言語は一般にドラヴィダ語とサンスクリットが融合したクレオール言語である。クレオール言語とはある民族が社会的に上位の民族に接触したときに生まれる言語で、単語(基本語彙)は上位民族の言語(上層言語)になるが、文法の基本は自己民族の言語(基層言語)を維持する。インドの場合、アーリヤ人の侵入によりドラヴィダ語のクレオール化が起きたが、その程度は北ほど強く南ほど弱い。タミールはインドの南端にありその影響は北程大きくないが、それでもサンスクリット由来の語彙を多く残している。大野説の問題点は日本語をドラヴィダ語との音韻対応によって変形されたサンスクリットと比較していることである。また、何よりもタミール人がドラヴィダ民族(インド系黒人でダークという)であり日本民族とは異なることである。民族を離れて言葉だけが勝手に来ることはないからである。それ故、日本語のルーツの問題を解くためには社会言語学的手法が重要と思われる。

日本語は弥生人の言語と考えられるので彼らのモンゴルからの移動ルートが問題となる。モンゴル定住民族の中からチベット民族とビルマ民族が中国四川省西部の河谷沿いに南下し、チベット高原およびビルマ(ミャンマー)に到達した。中国の民族研究者はこの移動ルートを「四川民族走廊」と呼んだ。両民族の一部は、さらにインドのガンガー川(ガンジス



川)流域に侵入した。チベット・ビルマ民族がこの地域に定住していたことはドラヴィダ語の研究者F. C. サウスワースが言語層序学的研究で指摘している。このビルマ民族こそが日本人(弥生人)のルーツであると仮定すると全ての事柄がうまく説明出来る。特に言語に関しては、チベット語もビルマ語も膠着語に入れられてはいるが、基本文法に於いてチベット語が中国語に近く、ビルマ語は日本語と殆ど同じで単語を置き換えるとそのまま日本語になるからである。

紀元前1500年頃アーリヤ人がインダス川流域へ進出するが、その影響でガンガー川流域のチベット・ビルマ民族社会でもアーリヤ化が起こる。言語も短期間にサンスクリットを上層言語とするクレオール化が進んだ。言語は征服者や文化の高い側のものに短期間に一挙に変化するが、そうしないとその社会で意思疎通が出来なくなるからである。近代言語学の父ソシュールはこれを共時性と呼んだ。また、彼らの言語がサンスクリットであったことはインドの著名な詩人ラージャシェーカラの「サンスクリット詩論」の中に記されている。このことから「日本語はビルマ語(ミャンマー語)と最古のサンスクリット(ヴェーダ・サンスクリット)から発達したクレオール言語である」と結論される。その際、新しく出来たクレオール言語の文法体系の詳細は独立した別のものになる。これが日本語文法の誕生である。それ故、日本語の基本語彙はサンスクリット起源ということになる。実際「音韻対応」と「語尾省略」の二つの重要な規則を用いることによって極めて多くの語彙について確認出来る。それらは日常語(身体語を含む)・方言・俗語・擬態語・幼児語・地名の他、歴史・宗教(神道)・記紀文献・万葉集等々あらゆる分野に渡る。なお、語尾省略の規則とは「語彙を意味の変化に関係なく語頭の1～3音節で表すもの」で日本語では不可欠である。現在でも外来語に対し頻繁に行われることは周知の事実である。

(かじ けいすけ 平成14年退職, 元化学研究所教授, 専門は高分子構造・物性)

洛書

腎臓内科学講座設立 5 周年を迎えて

柳田 素子

2011年10月に設立された腎臓内科学講座を主宰して無我夢中のまま4年が過ぎました。

設立当初の教室員は7名で、1名がインフルエンザで倒ればたちまち病棟と外来と透析室のどこかに穴が空くような状況で、1日1日無事に運営することだけで精一杯でした。

医学部附属病院の臨床ニーズに応じていくだけで精一杯だった初年度、教育システムと研究室の整備を行った2年目、そして、他科の所属だった腎臓内科医も合流した3年目と、それぞれの年に節目があり、今年の同門会員は138人になりました。

この4年を振り返って、特に大きな節目となったのが2013年の内分泌代謝内科の腎臓グループ合流でした。合流前は、背景が異なることや診療方針の違いなどを心配し、話し合いに時間をかけましたが、実際に合流してみれば、それぞれの得意分野を活かした協力体制がうまく進み、1+1が3にも10にもなるような化学反応が起こりました。今では非常に強い一体感をもって、診療、研究、教育にあたることができるようになりましたし、関連病院も含めた人事交流も盛んになりました。

講座設立当初は取れなかった研究指導の時間も徐々に確保できるようになってきました。腎臓病に共通した過程である「線維化」や「腎性貧血」、「修復再生」を担う細胞種の同定とその制御メカニズムの解明を目標に、大学院生の研究成果を一つずつ形にしています。講座開設と同時にMedical Innovation Centerで開始させていただいた慢性腎臓病の創薬プロジェクト、TMKプロジェクトもいくつかの創薬標的を同定することができました。本年4月からはプロジェクトの後期を開始し、前期で見つかった創薬標的を磨くとともにさらなる標的を探索していきたいと思っています。

臨床研究では、Onconeurologyという新領域をはじめました。Onconeurologyは、がん領域をさすOncologyと腎臓領域をさすNephrologyの二つを



あわせた造語ですが、がん患者さんに多彩な腎臓障害が認められることから最近注目を集めている診療科横断的領域です。当科では、がん患者さんにおける腎臓障害の解析に加えて、透析患者さんのがん診療が困難であり、施設間でばらつきがあることに注目し、全国のがん治療拠点病院23施設からなる多施設共同研究を行っています。本件に関しては、腫瘍薬物治療学講座の武藤教授、医療疫学講座の福原教授、臨床システム腫瘍学講座の奥野教授、医療情報学講座の黒田教授の温かいご指導、ご支援をいただいております。

この4年間を振り返って思いますのは、本当に恵まれた環境で仕事をさせていただいたということです。まず、なんといっても、このようなやりがいのある仕事をさせていただいたことにはどのように感謝しても足りませんし、日々、温かいご支援や励まし、貴重なご助言をくださった周囲の先生方にも心より御礼申し上げたいと思います。

そして、年月がたつほどに分かるのは、歴史ある大講座の層の厚さ、運営の見事さ、教授のリーダーシップとサイエンスの素晴らしさです。これほどに素晴らしい先生方がいらっしゃる環境で、そのお仕事を近くで見せていただき、学ばせていただけることに心より感謝いたします。

そして、本当に良い教室員に恵まれました。私をこの4年間支えてくれた教室員には感謝の気持ちでいっぱいです。講座設立時に目指したのは、教室員同士が互いの成功を心から喜ぶとともに、よい刺激を受け、成長できる環境作りでした。人柄が良く、前向きで一生懸命な教室員に恵まれたおかげで、それが少し実現できてきたように思います。

毎年、年初には年間目標をたてて、互礼会で教室員に伝えています。

今年は、教室員ひとりひとりのプレゼンスが高まり、輝くことを目標としました。これまで支えてくれた教室員が入局して良かったと思えるような教室を作っていきたいと思いますし、彼らが良い仕事をする事で腎臓病学に貢献し、これまでご指導いただいた先生方に少しでもご恩返しができることを目指したいと思っています。

どうか今後とも引き続きご指導のほど、お願い申し上げます。

(やなぎた もとこ、医学研究科教授、専門は腎臓内科学、腎臓病)

栄誉

富谷 至 人文科学研究所教授がスウェーデン王立アカデミー外国人会員に選ばれる

富谷 至 人文科学研究所教授は、スウェーデン王立アカデミー(文学・歴史・考古) Royal Swedish Academy of Letters, History and Antiquitiesの外国人会員に選出された。認証式は現地時間平成28年3月21日(月)にストックホルムで行われた。



王立アカデミーは、1753年に当時のLovisa Ulrika 女王によって設立されたスウェーデンの学士院である。

富谷教授の専門分野は、中国法制史、古文書学で、20年来、スウェーデン王立アカデミー、ストックホルム大学、スウェーデン国立民族学博物館との国際

学術共同研究をすすめ、それらの成果として、『流沙出土の文字資料』(京都大学学術出版会)、『東アジアの死刑』(京都大学学術出版会)を出版した。また駐日スウェーデン大使館において、シンポジウムを二回にわたって開催し、人文科学の発展、スウェーデンと日本の学術交流に多大の貢献を行ってきた。それにより、平成21年には、スウェーデン国王から、北極星勲章コマンドール章Commander of the Royal Order of the Polar Starを受章している。今回のスウェーデンアカデミーの会員選出はその業績をふまえ、スウェーデンと日本の学術交流を一層促進することを期待されてのことである。

(人文科学研究所)

話題

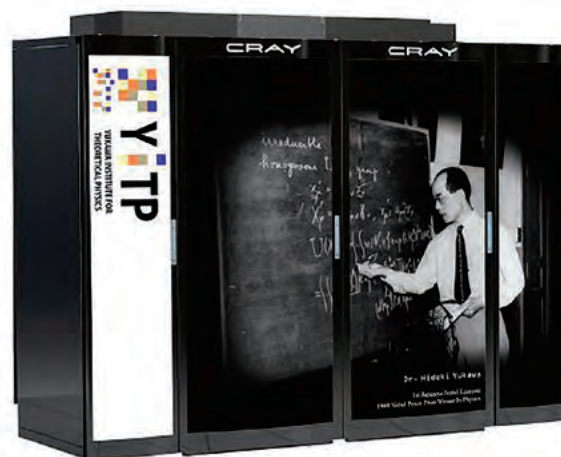
基礎物理学研究所に新しいスーパーコンピュータシステムを導入

Cray Inc.の協力により、1月25日(月)より基礎物理学研究所で新しいスーパーコンピュータシステムCray XC40 (292ノード, 9344 core, 343 TFlops, 36.5 TiB)によるサービスが稼働した。

基礎物理学研究所は理論物理学の世界的な拠点であり、素粒子・原子核・宇宙・物性などの分野の先駆的な研究で知られている。同研究所は、昭和24年湯川秀樹 教授が日本人として初めてノーベル賞を受賞したことを記念して湯川教授を所長として設立され、平成20年には益川敏英 元所長もノーベル物理学賞を受賞している。

2キャビネット構成のCray XC40システムは、基礎物理学研究所の従来のシステムと比較して設置面積で1/4程度のコンパクトさを持ちながら、逆に性能は、導入時に西日本最速であった従来システムの約4倍程度となった。さらに少ない電力消費や使い易いユーザ環境などの特徴を兼ね備えている。今

後、基礎物理学研究所における研究を促進させるだけでなく、日本全国の理論物理学分野の研究者(大学院生を含む)に開放し、当該研究をサポートする共有スーパーコンピューティングリソースとしても機能する予定である。



基礎物理学研究所に導入されたCRAY XC40の外観

(基礎物理学研究所)

2015年双青戦閉会式を開催

東京大学・京都大学の各運動部の総合対抗戦である双青戦の閉会式が北部総合教育研究棟益川ホールで行われた。今年度は18勝22敗3分けで惜しくも東

京大学に負け越したが、互いに健闘を讃え合い、交流を深める充実した大会となった。

2015年度双青戦 最終結果

競技名	今年度結果		競技名	今年度結果	
フィールドホッケー	引き分け	東大2 - 2 京大	陸上男子	東京大学	東大188 - 183京大
アメリカンフットボール	東京大学	東大14 - 10京大	陸上女子	京都大学	東大29 - 37京大
バスケットボール男子	引き分け	①東大63 - 60京大 ②東大55 - 63京大	相撲	京都大学	東大2 - 3 京大
バスケットボール女子	京都大学	①東大32 - 66京大 ②東大54 - 57京大	水泳	京都大学	東大1 - 1 京大
硬式庭球男子	東京大学	ダブルス東大3 - 1 京大 シングルス東大7 - 0 京大	スケート部 フィギュア部門	東京大学	
硬式庭球女子	東京大学	東大5 - 4 京大	ゴルフ	京都大学	京大3勝1分け
ソフト庭球男子	京都大学	東大6 - 8 京大	ラクロス男子	東京大学	東大10 - 7 京大
ソフト庭球女子	東京大学	東大2 - 0 京大	ラクロス女子	東京大学	東大12 - 7 京大
ボート男子	引き分け	東大1 - 1 京大	少林寺拳法	東京大学	東大2 - 1 京大
ボート女子	京都大学	東大8 : 42.78 - 8 : 35.67京大	弓道女子	京都大学	東大53 - 58京大
ハンドボール	東京大学	東大25 - 24京大	弓道男子	東京大学	東大133 - 122京大
フェンシング男子	東京大学	東大2 - 1 京大	剣道男子	東京大学	6人残しで負け
フェンシング女子	京都大学	東大0 - 3 京大	剣道女子	東京大学	1人残しで負け
準硬式野球	京都大学	東大2 - 12京大	ヨット		行われていない。
バレーボール男子	東京大学	東大3 - 2 京大	空手道	京都大学	不戦勝
バレーボール女子	京都大学	東大0 - 3 京大	卓球男子	東京大学	東大4 - 2 京大
バドミントン男子	京都大学	東大7 - 8 京大	卓球女子	東京大学	東大3 - 1 京大
バドミントン女子	京都大学	東大1 - 4 京大	ボウリング	京都大学	東大1 - 2 京大
硬式野球	東京大学	東大12 - 0 京大	ラグビー	東京大学	東大31 - 14京大
ソフトボール	東京大学	東大9 - 3 京大	アイスホッケー	東京大学	東大4 - 1 京大
サッカー	東京大学	東大2 - 1 京大	体操男子	京都大学	東大267.25 - 298.95京大
柔道	京都大学	東大0 - 3 京大	体操女子	京都大学	東大93.10 - 107.95京大

(教育推進・学生支援部(厚生課))

平成27年度総長杯(第2回ボウリング大会)を開催

3月4日(金)午後6時30分からROUND1京都河原町店において、平成27年度総長杯(第2回ボウリング大会)が開催され、31チームが参加した。会場

は、投球ごとに歓声があがり、ストライクも続出するなど、おおいに盛り上がった大会となった。

大会結果は次のとおり。

<団体>

優勝：理学研究科「なとりーず」チーム
(1,270ピン)

吉田隆二, 中曽根祐介, 名取保雄, 赤松亜季

準優勝：企画・情報部「ボウリングだほい！」チーム
(1,245ピン)

川内 享, 高見好男, 辻 謙治, 澤田浩文

<個人>

男性 優勝：吉田隆二(北部構内事務部総務課)
(426ピン)

女性 優勝：吉田美枝子
(物質－細胞統合システム拠点)
(308ピン)



優勝の理学研究科「なとりーず」チーム・個人
優勝(男子の部)吉田 隆二さん(真ん中)



準優勝の企画・情報部「ボウリングだほい！」
チーム



個人優勝(女性の部) 吉田 美枝子さん
(右から2番目)

(総務部(人事課))

特集

このたび、「寸言」に赤崎 勇 先生から原稿をいただきました。それを記念してインタビュー記事を掲載します。(本インタビューは平成27年5月15日の名誉博士称号授与式に際して行ったものです。)

ノーベル物理学賞受賞者・赤崎 勇 博士と京都大学 －大学時代に育まれた研究者の芽－

2014年、「明るく省エネルギーな白色光を可能にした効率的な青色発光ダイオードの発明」に対してノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇 博士。度重なる実験失敗にもめげず、他の研究者が断念した窒化ガリウムの可能性を信じ、こだわり続けた末の栄誉だった。2011年にアメリカ電気電子学会のエジソン賞を受賞した際は「persistent」な研究者と評された。

1952年に京都大学理学部を卒業した博士は、今も取材等の折にふれ、京都という地そして京都大学への強い愛着を語る。そして粘り強い研究生活を支えた学究精神は、京都大学の自由闊達な学風から影響を受けたとも。今回はそんな赤崎博士の大学時代の思い出をたどってみた。

幼い頃に芽ばえた京都への憧れ



赤崎 勇 博士

—1929年、鹿児島県知覧町(現南九州市)で生まれ、鹿児島市内で育った。年に数回訪れる知覧の風景が、博士に京都への憧れを芽生えさせることになる。

育ったのは鹿児島の市内でしたが、盆や正月などに本家のある知覧に行くことがありました。そこには武家屋敷があつて、親戚の伯父さんや伯母さんたちから「ここは京都の庭をお手本に、京都から先生をお呼びして造ったのですよ」とよく聞かされました。その頃から何か、子供心に京都という言葉が残っていました。

普段は鹿児島市内で過ごしているので、時々蘇る程度でしたが、私が旧制第七高等学校(現鹿児島大学)に入ったときに、私の寮の同室に京都の中学から来た友達がいって、よく京都の話を聞かされました。小さい頃の思い出と重なって、ますます京都への思いが募っていきました。

—京都への思い入れは現在も

卒業してから神戸や東京に勤めましたが、京都にはよく来ていました。友達がいることもありますし、京都独特の雰囲気があります。名古屋大学の先々代の松尾 稔 総長は京大の工学部を出られた方ですが、先生もよく「2週間に1回は、特に用事はなくても京都に行くんだ」とおっしゃっていました。私もその気持ちはよくわかります。6、7年前に大手術をした後ちょっと良くなったときにも京都へ来て、何の目的もなく京大のあたりをずっと歩いたんですが、百万遍のあたりに、かつて友達と長時間座っていた古い喫茶店が残っていました。京大が京都に良く溶け込んでいるというか、一体になっているこういう町は少ないんじゃないでしょうか。ちょうど「アルト・ハイデルベルク」というドイツの学生歌がありますけれども、それに出てくるネッカー川が鴨川に相当するということで、よくそれにたとえられますけれども、ちょっと他の大学にはないようなそういう感じを私は持っています。

京都大学入学と同時に受けた言葉、そして決心

—1949年、当時十何倍という超難関の入学試験を突破して、晴れて京都大学理学部に入学。入学式当日

に、博士は京都大学の学風を思い知らされる言葉に出会う。

今とは学校の制度が違って、入った途端に研究室に配属になるんです。入学式のその日、式が済んだ後、私が所属する研究室の先輩が、銀閣寺のところから哲学の道を通って南禅寺のあたりまで歩きながら、歓迎会兼花見を催してくれました。その途中で先輩が「大学というところは自分で勉強するところだ。大学は教えるところではなく自分でつかみ取るところだ」と言われたのを鮮明に覚えています。大学というところは何かを教えるところじゃなくて、将来学生たちが何かにぶつかったときに、どうやればいいかという問題解決能力を3年間につくることだ、そのた



京都大学時代、社寺仏閣巡りを楽しむ
赤崎博士(左端、大文字山、1950年)

めに大学は何でも準備すると、そういうことを当時よく言われてい

ました。その時に、「あ、これでやっと僕は大学生になれたんだ」と思いました。その印象は非常に強いですね。だからその後も手取り足取りということは決してありませんでした。卒業研究ですら割に自由勝手にやっていました。私だけじゃなくて、私の周り



京都大学時代の赤崎博士
(1950年代前半)

ーそしてさらにこの年、その後の博士の研究生活に大きな影響を与える出来事が起こった。

その年、湯川秀樹先生がノーベル物理学賞を受賞されるという快挙があり、ノーベル賞という言葉すら忘れかけていた、戦後復興途上の日本の国内が明るくなったような気がしました。湯川先生も、先生のお仕事も、私にとっては雲の上のことで、自分には全く無縁のことですけれども、いつか、何か本当に小さいことでもいいから、今まで誰もやっていないことを自分はやろうと、その時、近衛通りのプラタナスの道を歩きながら決心したことを思い出します。それから20年後に青色発光ダイオードがない、いややったけれども誰もできていないということを知ったとき、これこそ自分の仕事だというふうに、この時のことを振り返っていました。

敗戦後の暗い世相と当時の大学生活

ー博士の京都大学在学期間は、上記の湯川博士のノーベル賞受賞に始まり、サンフランシスコ講和条約が締結された1952年まで。当時の京都大学はどんな雰囲気だったのか。

入学したときの大学の雰囲気はすごくよかったです。戦後すぐで世の中は暗かったのですが、大学の中は違いました。京都は空襲を受けておらず焼けてませんからね。私が焼け跡から来たせいもあるでしょうが、非常に立派な大学だと感じました。それに学生たちの士気も高かったです。私の周りの者は皆、



基礎物理学研究所前に立つ湯川秀樹先生(1954年頃)



当時の医学部構内(1957年秋)

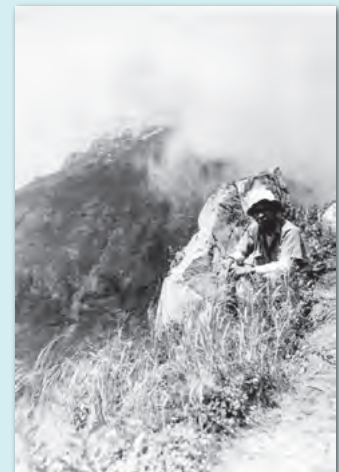
口に出して言わずとも、日本の復興のために頑張るんだ、という雰囲気を持っていました。卒業する1年ぐらい前、ドイツが奇跡的な復興をしていました。それを見習えという感じがあって、私も、私の周りもみんな、多かれ少なかれ産業立国の役に立ちたいという意識がありました。

—最初の1年間は下宿生活だったが、2年目から吉田寮に移る。

旧制高校の先輩に弁護士会の副会長をされていた方がおられて、今の熊野寮の西にちょっとした京風の邸宅がありました。何人も書生さんがいて、京大生の先輩も2人ぐらい下宿していました。食糧難の時代だったので、そこに来ないかと言われて部屋をお借りすることにしました。けれども下宿料を取ってくださらない。それが心苦しく辛かった。そうこうしているうちに先輩から吉田寮のことを聞いて入りました。吉田寮は自治寮で、2年生や3年生の先輩の方が何人かで面接されるんですが、当時は面接試験の倍率がすごかったんです。私は旧制高校時代も自治寮に住んでおり、当時の心友は寮時代の友達です。京大に行ってから同じで、学部とか学科とか関係なく、本当の心友は寮の友達です。

—当時の吉田寮はさながらサロン？

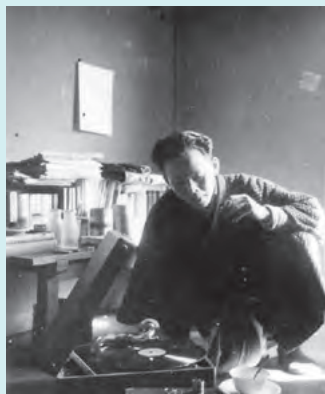
吉田寮は建物こそ古かったけれども、非常に立派な寮でした。当時は個室で部屋は廊下より一段高くなっていて、非常にいい雰囲気でしたねえ。私はクラシックが好きなのですが、レコード室があったりクラシックレコードを聴く部屋もあって存分に聴けました。ほかに茶室があったり、また各種の新聞を取り寄せてくれていて、ちょうど図書館のような役割をしていました。当時は守衛さんが2人いました。北、中、南寮三つあって、中寮に住んでいました。何号室か向こうに心友がいると夜まで話し込



北アルプスにて(1951年夏)

んでいても数分で自分の部屋に帰れる。事務室に事務員の方が3人ほどいて、サポートしてくれていました。

よく寮の友達と一緒に桂離宮とか修学院離宮に行きました。



下宿の自室にてレコードを楽しむ
(1952年)

当時、普通なら誰も行けなかったんですが、建築学の先生が紹介してくださったお陰でそういう所へ行けたり、あるいはみんなで比叡山を越えて琵琶湖へ渡ったり、いろんなことをしていました。勉強の面で特にプラスになったことはないかもしれませんが。



当時の吉田寮(1954年)

京大時代に培われた研究者としての姿勢

一博士のキャッチフレーズともなった「我一人荒野を行く」という姿勢は、京大時代に何かきっかけとなる出来事や出会いがあった？

1964年から勤めた松下電器の東京研究所で光る半導体の研究をしていて、青色を誰もやっていないと気づきました。みんなやっていたけどやめたんです。そのときに初めて、これこそ自分の仕事だと思いました。湯川先生がノーベル賞を受賞したときに受けた衝撃と、なにか人がやれないことをやろうと思ったことが20年ほど経ってよみがえったわけです。ある程度の成果が出たときに国際会議に発表しましたが、反応がありませんでした。インタビューした記者に反応がなかったと答えると「一人なんですネ」と言われました。専門の学会なのに窒化ガリウムで青色を研究しているという論文は全くない。「俺一人なんだな」と思いました。でも誰もやらなくても、一人でもやると言い続けました。

一博士に実験の大切さを教え込んだ教授は、理論と実験が相互に触発しながら前に進むことを、アウフ



ヘーベン(止揚)という哲学用語を使って強調した。理系の学生といえども、人文系の学問にも興味を持っていた。

もちろん人文系の学問にも興味を持っていました。それは旧制高校のときから当たり前のことで、誰でも持っていました。一年に少なくとも50冊は岩波文庫を読み、とか言われていましたから。旧制高校2年生の頃は大学は文学部に行こうと思っていたほどです。でもやっぱり数学、物理、化学が好きでしたから、理学部に進みました。研究にプラスになったかどうかは分かりませんが、少なくとも人生、人間の生き方には無関係ではない。読書というのは自分と対話すること。研究に直接プラスになるとかを考える以前の問題です。人格というか教養というか、そういうものの基礎になるのは読書です。これは文系、理系を問いません。それが私の考えです。

一赤崎博士は高校生を対象にした講演などで「若い人は世界を舞台に考えることが大切」と話す。いつも世界の動きを意識すること、あるいは留学等で世界に飛び出すことが必要と説く。

京都にしろ名古屋にしろ、若い人を親も離れたがらないし、自分も離れたがらない。地元志向が強いんです、そういうのはだめだ、どこでも飛び出して行きなさい、活躍する舞台は無限にあるんだ、と口を酸っぱくして言っていました。自分が考えたようなことは、高校の中にはいなくても、京都や日本や世界にはきっと同じようなことを考えている人が一人ぐらいいる。それと同じで、世界は広いんだということを、よく学生に言っていました。こんな狭いところに閉じこもるな、ニューヨークでもどこでも出て行きなさい、と未だに言っています。

一ノーベル賞を受賞した青色発光ダイオードの研究は、直接的には赤崎博士の京都大学在籍時に生まれたものではない。しかし博士自身が何度も語ってくれたように、自らの進むべき道を自ら切り拓く能力と意志力を育んだのは、京大の持つ自由の学風と「自学自習」の基本理念だったといえそう。

